My Little Stuffed Toys

ES4

2011/10/31

前日の夜の事を、朝永由希（あさながゆき）はあまり覚えていない。
正確には酒を飲んでからの記憶であり、それ以前の出来事は――皮肉にも、それこそ忘れたい記憶であったのだが――しっかりと覚えている。
「……ねー、……てよー……」
ともあれ、何とかして彼女は自宅へ帰り着き、しかしスーツのまま朝を迎えることとなった。
「……起き……よー……遅刻し……」
果てなき睡眠への欲求と社会人としての勤労への意識、彼女の天秤は大きく本能側へと傾いており、一人暮らしのこの部屋にそれを妨げる者などいなかった。
はずだったのだが。
「早く起き……と遅刻す……よー？　……きてよー」
「……んんっ……あと五分……」
「お姉さんは覚えてないだろうけど、もうそれ四度目だから。起きてよー」
半分寝ている頭で、由希はぼんやりと考える。こんな妙な起こし方をしてくる目覚ましなど買っていただろうか。そして、さっきから体の上をピョンピョン飛び跳ねているのは何だろうか。ペット禁止のこのマンションに犬か猫でも入り込んだのだろうか。
全てを確かめるために、由希はゆっくりと目を開けた。
「起ーきーてー……あ、起きた？」

そこには、ぬいぐるみがいた。

「……は？」
テディベアそっくりの身体に、粗悪な模造品のごとく顔だけ豚のようなぬいぐるみが、目の前で動いている。あまつさえ声まで発している。
不思議、といえるその光景に由希の眠気は一瞬で吹き飛んだ。そして覚醒した彼女は一瞬で現状の結論を導き出した。
「夢ね」
「違うよー！」
ポコポコポコポコ、とぬいぐるみの腕で叩いてくる夢の物体（推定）。
「ほらー、触れるでしょ？　夢じゃないよー！」
「最近の夢は高性能らしいわね」
「違うってー！」

実のところ、由希もこれが夢ではないと薄々気づき始めている。ただし、現実と認めるにはあまりにも彼女の常識から外れていたため、受け入れ難いだけなのだ。
動くぬいぐるみ。ああなんたる非常識。

まだ自分は寝ぼけているのだ、という思い込みを現実逃避の免罪符としながら、由希は現状を確認する。

体の上に動くぬいぐるみが一体。
なぜか自分を起こすのにご執心のようだ。
今日は金曜日。すなわち平日。
外からは眩しい陽光が差し込んでいる。
現在時刻、出社時間 30 分前。
ほぼ遅刻確定。

「行ってきます！」
「え、ちょ、はやっ」
部屋に散乱する必要道具一式をものすごい速度でかばんに放り込み、由希は勢いよく玄関から飛び出した。

バス停まで走る道程で由希は考える。
確かに家のあれは不思議だ。非科学的であり、実は自分は精神的に不味いのだろうかとさえ思えてくる。
だが物事には優先順位があり、不思議なこと、信じ難いことというものは得てして日常的行動よりもそれが低い。
なにより、会社に行けばあの不思議物体は消えているかもしれず、会社に行かなければ働き先が消えているかもしれないのだ。
……しかし例え何だったとしても、昨日の今日で会社に大きな失態をさらすわけにはいかない。
由希はひとまず今朝の事を記憶の隅に追いやり、会社への最短ルートを模索し始めた。

ぶっちゃけ帰りたくない。
夜七時三十分、帰途に就いた由希の偽らざる本音である。
無理やり自らを仕事に没頭させて朝の出来事を思い出さないようにと頑張っていた由希だったが、万策尽きて（正確には、何も手を打たなかったからこそ）、背水の陣である。
最悪、家に帰らないというのも考えた由希だったが、あいにく今日は週末である。近場のビジネスホテルや娯楽施設も込み合い、うら若き乙女（自称）が一人で飛びこめる雰囲気ではない。その前に財政事情という問題が立ち塞がっているのだが。
「実家は遠いし、頼れる相手なんて……」
つい先日まで頼れた相手のことを思い出してしまい、ますます落ち込んでいく由希。

「……あーもう、こんなことしてても始まらないわ。女は度胸！」
由希は覚悟を決め、本当は夢であってくれと強く願いつつ、家へと歩き出した。

「……電気がついてる」
由希の部屋の玄関上の電気が、出迎えの光を放っていた。
これがもし中の灯りだけなら消し忘れだと誤魔化せただろうが、外の電気ではそうはいかない。なにせ平日は点けないのだ。夜の来客なんて精々週末にしか来なかったから。
つまりこれが示す事実は一つ。

「……消し忘れね」
どうしても現実の尺度から逃れたくない由希だった。

ドアノブに手をかけると、案の定鍵を掛け忘れていた。
玄関の靴が綺麗に並べられているが、整頓したことも忘れていた。
あまつさえいい匂いのする料理が今の時間に出来るように用意したらしいが、やはり忘れていた。
……我ながら往生際が悪い、と由希は思う。
もうどうあがいても、目の前で動き、なんと家事までしているぬいぐるみの存在を無視することなどできないというのに。
「あ、お帰りなさい！　お風呂湧いてますよ！」
「……ただいま」
由希は、このバカげた非現実を、渋々ながらも大人しく受け入れることにした。

「……で」
ぬいぐるみ謹製の食事を終えた後、由希が切り出した。
「そろそろ聞いていいわよね。あなたは何？」
「ボク？　ボクは昨日お姉さんから税込 420 円で買われたぬいぐるみだよ？」
「動くぬいぐるみを売る店なんて知らないんだけど」
「露店だったからねー。まあ他の仲間も動けるわけじゃないんだけど。僕もなんで動けるかわからないしね」
クリッと頭を傾けるぬいぐるみ。動きは実にアニメーションのそれである。ただどうしても、首から上はあまり愛らしい様相ではない。

「……ところであなた、なかなか不細工ね」
「それ今ツッコむところじゃなくない！？　っていうかお姉さんが買ったんじゃん！」
「酔ってて覚えてないのよね」
うわあああんと泣き出す（実際には泣けないからフリだけだが）ぬいぐるみ。
「あー、ごめんね。とにかく、なんで動けるかは自分でもわからないのね」
「そうなんです。でも、とりあえず恩返しとして、お姉さんの身の周りのお世話でもやろうかと」
「恩返し？」
「ええ。なんといっても買っていただいたので」

それだけで？　と由希は思う。そういうものなのかも、とも思う。
どちらにせよ、恩返しと言われて、さらにはなぜか随分と慕われているようだ。おいそれと追い出すわけにもいかないだろう。下手すると都市伝説を生み出してしまう。怪奇、万能家政婦ぬいぐるみ。シャレにならない。
しかし皮肉なものだ。一人離れていったと思ったら、すぐ別が現れるなんて。まあこいつは人間ではないし、あいつに似ているわけでもないが。

夕食を終え、風呂もすませればもう結構な夜である。独り暮らしであり、明日が休日な由希にとってこの時間は静かで心休まる時間となる。
だが奇妙な同居人が増えてしまった以上はそうともいかない。聞きたいことも山ほどあるのだ。
そのはずだったのだが……。

「……なんかねー、もう割とどうでもよくなってきた」
「ボクの事？　自分でいうのもなんだけど結構な非常識系だと思うよ？」
「だけど、どうあがいても目の前にいるしね……。料理まで作ってもらって、さすがに存在ぐらいは信じるようにもなるわ。それに自分の事わからないんでしょう？」
「んー、まあそうだけど……」
チマッと机の上に乗りながら会話するぬいぐるみ。傍から見れば依然シュールな光景だ。
「あ、じゃあじゃあ、お姉さんのこと聞かせてよ」
「私の事？」
「お人形さんに向かって、一人語りとか辛いことを聞かせるのって定番でしょ？　それに、お姉さんのこと聞いてみたいな、ボク」
「……別に、話すようなことなんてなにもないわよ。愚痴なんて社会人になったら山ほど出るしね。喋って消費できるほど生産スパンが遅くないのよ」

「でもお姉さん、昨日泣いてたよね？」
「……」
酔う前に泣いていたのは事実だ。酔ってからも泣き続け、何を血迷ったかぬいぐるみを買い、そしてこいつに見られてしまったのか。
「ボクでよかったら聞くよ？　お姉さんが望むなら返事もしないで、ただのお人形さんになるよ。……どうかな？」
「……別に、大した話じゃないわ。それでもいい？」
そう前置いて、由希は話し始める。

「仕事でね、ちょっとミスしちゃったのよ。小さくはないミス。上司から強く怒られて、朝からそれを引きずって、また細かいミスを連発。単純な計算も出来ないなんて、本当にダメ社会人よね」
今日も上司の目は怖かったが、一日たったのと朝のぬいぐるみ騒動のおかげで、今日の仕事には変に引きずることは無かった。
「でもね、その後に食事の約束をしてたのよ。彼氏と。……いえ、今では彼氏だった人と」
由希の心にある、飲んでも結局忘れることのできなかった鈍い痛み。
食事の席で突然別れを切り出され、ただ夜の街をうろつくこととなったあの日。
「ショックなことが立て続けに起こって、もうどうしていいかわからなかったわね。次の日も仕事なのにヤケ酒あおる位だったんだから」
「……辛かったんだね、なんて簡単には言えないけど、大変だったんだね」
「いーのよ、結局どっちも私に非があるようなもんなんだから」

仕事に集中していないからだ、と上司は言った。俺の事を真剣に見ているのか、と彼は言った。
由希の本心はともかく、どちらからも真面目に向き合っていなかったのだと宣告されたのだ。思い当たることがないでもなし、結局自分が悪かったのだ、と由希は思っている。

「これでおしまい。全然普通の話でしょ？　楽しくもなんともない」
「そりゃ楽しくはなかったけど……世間的によくあることだとしても、お姉さんが大変だったことを『普通のこと』だなんてボクは片づけられないよ」
「いやに入れ込むわね……実はカウンセラーもどきのストーカー？」
「そんなのがいるかどうかわからないけど、じゃあデリカシーなさげな質問を一つ。その彼氏ってそこの写真立ての人？」
ぬいぐるみの腕が差した方向にあるのは、シンプルな写真立て。卒業式だったのだろう、筒を抱え、桜と校門をバックにした学生が立っている。

「学生に手を付けるとは……なかなかやるねＯＬ」
「変な早合点してんじゃないわよ。あれは兄さん。高校卒業の写真」
「へー……って、古っ！　何年前だよ！？」
「私が 16 の時だから、えーっと……」
「いいよ答えなくて！　そこは『女性に年を聞くなんて失礼じゃない？』とか答えるところだよ！」
ウガーッとうなりながら無駄にツッコミの切れを増していくぬいぐるみ。
「ごめんごめん、年の近い二人兄妹だと、なんかその辺麻痺してくんのよね」
「……まあいいけど。でも本当に古い写真だよね。もっと新しいのないの？」
「……うん。それ以降の写真は一枚もないわ。……すっごく遠いところに行っちゃったしね……」
「……なんか、本当にデリカシーのない質問だったみたいで、ごめんなさい」
シュン、としているように見える。表情がない分、大げさに身体で感情を示すようだ。
「気にしないでいいわ別に。もともとそのつもりだったんでしょ？」
「でも、ブラコンのお姉さんにあまりにも酷な質問を」
「待てやこのブタクマ」
「ブタクマってなんだよ！　それに兄の写真を後生大事に飾ってるのは十分なブラコンだってあー！　逆さ吊りはやめてー！　血が、頭に血がー！」
「血の通わぬ分際で何を言うか」
「気分の問題だよ！　少し場を和まそうと思っただけなのに……」

二、三回ぐるぐる回してからぬいぐるみを元の場所に降ろしてやる由希。

「で、ブタクマって何さ。まあ予想はつくけど……」
「顔が不細工で豚みたい。だからブタクマね。ちょうどいいからこれ名前にしなさい」
「ひどいよ！　ぬいぐるみにも人権はある！　断固改名を要求する！」
ムキャー、と両腕を振り上げて一人デモを開催するぬいぐるみ。
「じゃあブーさんで」
「明らかにそれブタからとったよね？　ついにクマのほう投げ捨てたよね？」
「違う違う……その、えーと、あれよ、黄色いハチミツ好きなのと似てるから、それで」
「明らかに後付けってのが丸わかりだよぅ……別に黄色くないし」
シクシク、と泣き崩れるぬいぐるみ。なかなかに感情表現が豊かである。

「これで昨日の事も兄さんの事も話したわよ。満足？」
「……うん。いろいろお姉さんのことがわかったよ。ありがとう」
「じゃあ、そろそろ寝るから。ブタクマはどこで寝る？」

「いきなり自分でつけた名前を否定したね。ボクはその辺で転がってても寝れるよ。体柔らかいし」
「そう。じゃあおやすみ」
「おやすみなさい」
パチリと電気を消して、由希は寝床にもぐりこむ。
疲れた体は睡眠を欲し、由希を急激に眠りへと誘っていく。
こんな風に、安心して「おやすみなさい」を言ったのはいつぶりだろうか。眠りに落ちる寸前に由希はそう思った。

明けて土曜日。カーテンの隙間から差し込む陽光が今日も快晴であることを教えてくれる。
目覚めた由希を待っていたのは、味噌汁の匂いだった。
はて、自分は実家に帰ったのだろうか、と錯覚するも一瞬、すぐに由希は昨日のことを思い出す。
「ああ……夢じゃなかったのね」
「そんな『残念だ』みたいな声音でいわれると正直ヘコむけど、朝食出来たよ」

「にしても、あんた本当に器用ね。なんでぬいぐるみの身体で家事出来るわけ？」
「まあ出来るものは出来るということで。早起きしたら見れるよ？」
食卓に上がっているのは味噌汁、海苔、目玉焼きと今どき実にそれらしい朝食だ。
そしてどれも、ちゃんと出来上がっている。ぬいぐるみが作ったなど誰が思うだろう。
「実家の食事を思い出すわね、このラインナップ」
「おふくろの味、ってやつ？」
「んー、うちではどっちかっていうと兄さんの味ね。お母さんは夜勤が多かったから、小さいころから朝食は兄さんが用意してくれたの」
「……2つしか離れてないのに、交代はしなかったの？」
「任せっぱなしにしてたら、私の食事を作る能力はまったく成長しなくてね。兄さんが作ったほうが美味しいし」
「負のスパイラルに陥って、料理スキルを手に入れ損ねたのか……」
「いいから黙って」
食え、と言いかけた由希の言葉が止まる。目の前に朝食は確かに二人分。双方もうすぐ終わるだろう。
「……ブー、あんたどうやって食べてるの？」
「見てわからない？」

「見てわからないし、たぶん聞いてもわからないと思う」

ブーの持った箸が動く。料理をつかむ。開かないぬいぐるみの口元へ運ぶ。いつの間にか消えている。
見逃しているわけではないが、どうしても食べている瞬間がわからない。
「あんたって非常識よね……動いて喋って家事してる時点でもう十分あれだけど」
「まあ例によって仕組みは聞かないで。ボクにもわからないから」

朝食後。特に用事のない由希と、一通りの家事を終えてやることのないブーの二人が手持無沙汰に部屋にいる。
「お姉さん、どっか出かけない？」
「いい年した女性がぬいぐるみと一緒にお出かけってのは随分とキツイ絵なんだけど」
「でも、こんなに天気がいいのに何もしないのはどうかと思うんだよねー」
「……本当は用事があったんだけどね」
「どんな？」
「……彼と会う約束」
「あぅぅ……またボクは余計なことを……」
シュン、となるブー。
「いいの。……彼の言うとおり、本当にあまり真剣じゃなかったかもしれないし」

振られた時は泣いた。悲しかったのは事実だ。付き合っていた時も、別に適当な気持ちだったわけではない。
しかし、心のどこかで何か足りなさを感じていたような、そんな気もするのだ。パズルのピースがピッタリとはまらないような何かを。

「しかし、確かにこのまま何もしないのはあまりにも堕落してるわね……」
「じゃあじゃあ、いきなり失礼なことを申し上げるようですが」
「何よいきなりその喋り」
「僕を洗ってください！」

洗濯機のスイッチを入れる。モードを乾燥までに選択し、ふたを開けてぬいぐるみをその中へ……。

「ちょちょちょ、ちょっと待ったー！！」
「何よ、ブーが洗ってくれって言ったから洗濯機で洗ってあげようとしてるんじゃない」
「動かないやつらならともかく、ボクの場合はどうみても手洗い必須でしょう！　こんなの意識があるうちにやられたら拷問だよ！」
「手洗いねえ……。あんた、自分で洗えないの？」
「いやあ、芯の入ってない体では力が弱くて」
中には綿が詰まっているらしいブーの体はたしかにふにゃふにゃである。
「まあ面倒だけど、家事してもらってる恩があるしね。水でいいんでしょ？」
「38 度のお湯に、髪を保湿するタイプのシャンプーがいいなー」
「洗濯機で十分ね」
「わーごめんなさい！　でもお湯がいいのは汚れが落ちやすいからですこれホント！」

「しっかし、人形が風呂に入りたがるってのも不思議な話に聞こえるわね」
「ボクは露店に居たしねー。とはいえそんなに汚れてはいなかったけど、それでも綺麗になりたいとは思うんだよ」
そういうブーは今ハンガーに吊るされて乾燥中だ。
ドライヤーを使うと表面が痛むそうだし、絞ると縫合が破れそうで怖いと本人が拒否。
結果として自然乾燥となった。
「しかしブーが吊るされてると本格的にやることないわね。もう一眠りしててもいい？」
「自堕落な生活はんたーい！」
しかし高いところに吊るされたブーには何もできない。由希はなにやらわめくブーの声をＢＧＭに眠りについた。

由希が再び目を覚ますと、夕方だった。吊るされていたブーは自力で脱出したらしく、すでに夕飯の準備を始めていた。
「あ、起きた？　冷蔵庫の中身少なかったからちょっと足しといたよー」
もう、どうやって？　と聞く気もない。いつの間に自分の財布を手にしたのかもあまり気にならない。というより、気にするだけ無駄だといったところだろうか。
しかし、と由希は考える。この生活は非常に楽だ。炊事洗濯料理に掃除、すべて自分がやらなくていいというまるでお嬢様のような生活。相手がぬいぐるみだというのだけが問題点だろうか。メリットデメリットでいえば、そんなこと問題にはならない気がする。

「あー、ゆっくりとダメになっていくのが凄いわかる……」
「駄目だよ、お世話するために来たけど、駄目にするために来たわけじゃないからねー」

台所からブーの声が聞こえる。どうやら夕食が出来るまではもう少しかかるらしい。
「ちょっと下のコンビニ行ってくるから。すぐ戻るわ」

適当なデザートを二つ買って、支払いを済ませる。
コンビニというのは、客が無口でも何も問題がない場所だ。商品を渡して、計算された額を渡すだけ。そこに言葉を挟む必要が全くない。
コンビニから出るときにふと由希が気づいたのは、昨日の夜からぬいぐるみとしか話してないという――言葉通りに捉えると随分とイタい――事実だった。

夕食を終えて夜。
これが親しい友人同士で、あるいはせめて人間同士ならばとりとめのない会話が繰り広げられそうなものだが、二人は出会ったばかりでしかも片方は非常識な存在である。かと言ってその神秘が解明できるわけでもなく、結局「よかったら、お兄さんのいたころの話聞かせてほしいな」というブーの発言により、由希の過去話となるのだった。

別にあんまり話すようなこともないんだけど、と前置きして由希は話し始める。
幼かった頃はずっと一緒にいたこと。いつも面倒を見てもらっていたこと。自分がフラれた時は慰めてくれたこと。兄さんがフラれた時は笑い飛ばしてやったこと。中学も高校も一緒だったから、一年間だけは一緒に通えたこと。よく先輩面しながら勉強を教えてくれたこと。

「けど……馬鹿よね。いつの間にか私のほうが先輩になっちゃったんだから……」
そういって遠い目をした由希の瞳には、何が映っていたのだろうか。
その瞳を見たブーは、静かに一つの決断を下そうとしていた。

翌日。快晴の日曜日。
今日もぬいぐるみシェフの定番朝ごはんを食べ終えた由希は、唐突に言った。
「ねえ、一緒に出掛けようか？」
動きを止め、キョトン、という擬音が聞こえてきそうな雰囲気でこちらを見るブー。
「『いい年した女性がぬいぐるみと一緒にお出かけってのは随分とキツイ絵なんだけど』とか言ってた人がどういう風の吹き回し？」
「綿しか詰まってないくせに随分と立派な記憶力ね。スポンジみたいな吸収力とはいうけど、洗い流して絞ったら忘れてくれるのかしら」

「ボク、時々お姉さんの言動から殺意を感じるんだけど、たぶん気のせいじゃないよね」
とにかく、と由希は話し出す。
「流石に昨日の生活を振り返って私も反省したのよ。だからせめて今日は家から出なきゃね。ただあまりお金のかかることは出来ないけど」
「……いいの？」
「何遠慮してんだか。ほら、準備して……っていっても、別にあんたは持ち物とかないか。外にいる間はこのバッグの中に入っててね」
そうして、一人と一体の初お出かけとなった。

「ところで行き先は？」
「出てから考えるわ」
「無計画ぅ」

テーマパークなどは金がかかりすぎるので、近場の映画館や美術館など考えたが、ブーの思いついた希望は、街を案内してもらうことだった。
「結局ボク、露店とコンビニとお姉さんのマンションしか知らないんだよね。よければ、今お姉さんがどんな街に住んでるのか教えてほしいな」
そういうわけで、由希も地図を片手にこの街を散策することとなったのだった。
近場の事でも意外と知らないことは多いものだ、と由希は思う。たとえば、今まで通ったことのなかった路地の先に、今まで行っていた場所より家から近い薬局が現れたりした。
近すぎて気づかない、そういうことも多いのだろう。そうやって今まで自分が見逃してきたものは沢山あるかもしれない。
そう、たとえば、このバッグの中でピョコピョコ動くぬいぐるみの事とか。

交差点に差し掛かった。
「あ、この辺だね。お姉さんがボクを買ったところ」
しかし、今その場所には露店の影も形もなかった。
「だいたい一月に一回ぐらいしか店出さないんだって。お姉さんと出会えたのはやっぱり運命？」
偶然が重なることを運命と呼ぶのだ、とある人は言った。運命が確率の重ねあわせであるならば、ショックを受けていた自分のところに家事も出来て動くぬいぐるみが現れるというのはどれほどの確率だというのだろうか。
あるいは――やはり必然なのだろうか。現れるべくして現れた。いや、このぬいぐるみが現れたいと望んだから現れた？

「お姉さん？」
ハッ、と現実に引き戻された。
「な、なに？　なんか用？」
「いや、気難しい顔してたから……お悩み？」
目下悩みの種が無邪気な声で訊いてくる。
「別に……似合わないこと考えてただけよ」

由希は哲学者でも運命論者でもない。考えても答えなどでない問題に思考を巡らせてしまうのは、やはりそれだけこの存在が気になっているのだろうか。
気が付けば夕日が二人をオレンジ色に染めていた。

帰宅して、今日は由希が夕飯を作ることにした。
「……何よその『え？』って顔は。仮にも独り暮らししてたら最低限の家事スキルぐらい身に着くわよ。……たぶんあんたには敵わないけど」

「あ、普通においしい」
「いきなり失礼ね。あとでコインランドリー行く？」
「いやいやいやいやそうじゃなくて。こういうときって『ジャリ』とか『ドロドロ』とか、そういう擬音系が登場するものかと」
「ブーが来るまで私は擬音系食べて生きてたわけ？　それならもう開き直ってコンビニ弁当にするわよ」

そんな応酬をしつつ、由希はなんだか穏やかな気持ちになっていた。
不思議なものだが、こんな非常識にも慣れてしまったのだろうか。それとも、話し相手がいるというのはこんなに安心できることだったのだろうか。
そういえば、幼いころは兄に何でも話したものだった。そして、兄は何でも聞いてくれたものだった。
顔を合わせて互いに話す。それを懐かしいと、そう感じる程度の月日は流れてしまったが。

夕食やいろいろを終えて、早くも恒例となってしまった感のあるトークの時間となった。
「あーあ、また明日から仕事が始まる……」
「大丈夫だよ。お姉さんなら出来る出来る」
「またあんたは適当なことを……」

「適当じゃないよ」
いきなり声が真面目になった。由希は寝転がりかけていた身体を起こし、小さいテーブルに腰掛けるブーを見つめる。
「……ブー？」
「見てたから、わかる。お姉さんは心の強い人だ。この前はちょっと強風にあおられて揺らいじゃったけど、しっかり大地に根付いている、丈夫な人だ」
「ブー、あんた、この三日ぐらいだけでなにがわかるって」
「違う。ずっと見てた。ボクは……いや、俺は、由希が生まれた時からずっと」

言葉を無くす由希。ぬいぐるみは話し続ける。

「ずっとこの世に残した妹が心配だった。独りで大丈夫だろうか。生活は出来るだろうか。何か失敗してないだろうか。変な男に引っかかってないか。すごく、すごく心配だった」
「俺が見ていてやれないことも不安だった。由希は泣き虫だったから。なんとかして、またお前の近くにいられないか。そんなことばかり考えて、ずっとこっち側に残っていた」
「ある日、俺はぬいぐるみの中にいた。そしてそれをお前が買っていった。ひょっとしたら、お前が買っていくぬいぐるみだから俺が入ったのかもしれない。でも、そんなことはどうでもよかった。また由希と暮らせると、それがまず嬉しかった」
「あの日、お前は落ち込んでいた。心配が的中したと、俺はやるせない気持ちになった。だから、せめて愉快な相手でいようと、しばらく道化師（ピエロ）でいることにした。また落ち込んでいたら、俺が励ましてやろうと」

でも、とぬいぐるみは立ち上がる。

「そんな心配は、本当は必要なかった。由希を見てたらわかる。お前は真っ直ぐ育った、誇れる妹だ。この三日、お前をよく知る俺が見てたんだから間違いない」

そして、

「だから、俺の心配は消えた。……もっと一緒に居たかったけど、もうすぐ時間みたいだ。またお前を一人に残してしまうけど、大丈夫だよな？」
「……」
由希は、顔をひどくゆがめていた。泣くのを堪えているのだろうか。
「じゃあな。兄さんは、いつでもお前を天国から見守っているから。だから安心して生きろ。……元、気でな……ゆ……き……」

そして、そのぬいぐるみの身体がゆっくりと前へ傾き、テーブルから落ちる。
か細い声でぬいぐるみの身体が最後の声を発する。
「最後に……一言、『兄さん』と……」
落ちる身体へ慌てて手を伸ばす由希。かける言葉は、話の途中で言えなかった、ただ一言――。

「何縁起でもないことしてくれてんの、このブタクマ」

ムンズ、と足を捉えて逆さ吊り。

「あれ？」

瞼があれば、まさに今こそパチクリしていたであろう雰囲気で、何事もなかったかのように動き出すぬいぐるみ。
「あれ？　あれれー？　なんで？　完璧な雰囲気と演技だったと思うんだけど？」
「まずあんたはすごーく大事な前提条件を間違えてるわ。……兄さん死んでないから」
怒気をはらんだ声で告げる由希。表情筋も大半が怒りを示すことに稼働中だ。
「ウソだ―！　状況的に明らかに故人でしょー！　遠いところに行ったって、やたら寂しそうに言ったじゃないかー！」
「寂しいのは事実だから認めるわ。今兄さんは外国にいるから。誰も天の上なんて言ってないわ」
「『いつの間にか私のほうが先輩になっちゃったんだから』とか言ってたじゃないかー！死んだ人追い越した時の常套句でしょー！？」
「あの馬鹿兄、三浪したのよ。さらに途中で海外の大学に入りなおしたしね」
「なんで高校の卒業式が最後の写真なのさ！　明らかに大学入学前に死んでるでしょこれ！」
「大学入ってからいきなり『写真に写ると魂が抜かれる』とか言いだしたわね。どんなＢ級ホラーよ」

あとなにより、と由希は追い打ちをかける。
「兄さんの一人称『僕』だから。俺とか言わないから」
完全ＫＯ。ブーはがっくりとうなだれ……ようとして、足首をつかまれたままなのに気づいた。
「あのー、そろそろ降ろしてもらえませんか？」
「水責め、火あぶり、市中引き回し、代用モップ、どれがいい？」
「うわーん！　本当にごめんなさーい！　心の励みになればいいなと、良かれと思ってしたことなんですー！」
「まったく……。で、結局あんたは何物なの？」
「さあ？　最初に言った通り、本当にわからないんだ。ここは一つ、妖精みたいな感じで捉えてくれた方がいいんじゃないかな？」
「まったく本当に非常識ね。……あ、いけない、そろそろ電話しないと」
電話？　と、（逆さ吊りのまま）首をかしげるブー。

「週に一回、兄さんに電話することにしてるの。時差を考えるとこれぐらいの時間ね。まったく、国際電話も安くないってのに」

「うーわ、すっごいウキウキしてる。そりゃこんだけブラコンなら彼氏もいなくなるってもんだよ」

「雑音が入らないように、洗濯機でも回そうかな」

「洗濯機回すほうがゴウンゴウンうるさいんじゃないかなー！　あ、ちょっと、これはマジな目ですよー！　いやー！　赤い服と一緒に洗われたら色移るー！」

「あ、もしもし兄さん？　うん。元気元気。そっちこそどうなの？　……いつも通りって、また結構生活ギリギリにしてるでしょ。なんかあったら言ってよね。お互い様でしょ？　え、彼氏でも出来たかって？　なんで？　……ああ、まあ彼氏じゃないけど、愉快な相手と同居してるから、楽しくないといえばウソね。兄さんも彼女出来た？　そっち金髪白人天国でしょ？　……ん？　ああ、今洗濯機回してるから、ちょっとうるさいかな。そう、急ぎのものがあって。……はいはい、兄さんも体に気を付けてね。それじゃおやすみ……っていうか、そっちでは今がいってらっしゃいぐらいだっけ。……ん、同居相手？　顔ぐらい見せろ？　写真じゃ信じてもらえないと思うわ。お正月に会うときにでも連れてくつもり。じゃあ、また来週ね」